

琉球大学学術リポジトリ

『南洋群島』 目録補遺

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010152

『南洋群島』目録補遺

仲程昌徳

『旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究』(平成12年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究B(2))研究成果報告書 研究代表者石川友紀 平成十六年三月)に発表した『南洋群島』目録にはいくつかの「欠」がある。

その後の調査で「欠」の第一巻第七号, 第八号, 第十号, 第十一号の四冊が見つかった。四冊はハワイ大学ハミルトン図書館に所蔵されているものである。これで『南洋群島』の第一巻は全号揃ったということになる。

目録を作成し「欠」になっていた四箇所をうめるとともに, 「報告書」に掲載した論考「南洋群島の沖縄人たち——雑誌『南洋群島』に見られる沖縄人をめぐる言説」の補遺として, 新たに見つかった関連表現を取り出し紹介しておきたい。

『南洋群島』八月号, 第一巻第七号は, 「江口拓務事務官渡南の砌り, パラオ在住民間有力者との間で行はれた金融機関に関する応答要旨」で「一般に発表して得る所少なからざるものがあると考えたので, 此处にこれを掲載することにした」として「パラオ民間と金融機関」と題し「一, 某水産合資会社代表者との応答」「二, 呉服雑貨販売業某氏との応答」「三, コロール町総代並南貿支店長との応答」「四, 某漁業者との応答」の「要旨」を掲載しているが, その「四」に, 次のようなのがあった。

問＝漁業組合に加入して居られますか

答＝私共沖縄に居りました時分漁業組合が失敗した例もあり沖縄組合の如く失敗するにあらずやとの懸念もありますので漁業組合へは加入して居りません

問＝鯉漁業関係者は何人ですか

答＝漁夫が二十六人, 製造工が十四人, 計四十人であります また漁船は全員出金して造りました

問＝鯉節は何処へ販売して居りますか

答＝大阪に代人を置き, 主として大阪の中央市場に出すことにして居ります

問＝漁具, 油類, 食料品は何処から仕入しておりますか

答＝食料品等は主として大阪から仕入れ, カーバイト, マシン油は南興水産より, 重油は元大阪より購入して居りましたが最近は南洋石油株式会社より購入して居ります

問＝重油は一ケ年何程購入しますか

答＝一ケ年三百ドラム内外です、値段は以前内地より十七円五十銭で購入して居りましたが、最近は十一円五十銭の地元購入です

問＝鯉の売上所要経費は何程ですか

答＝鯉の売上高は四万円内外、所要経費は一万八千円内外です、残りの二万二千円は出金者全員分配して居ります

問＝漁業者として何か希望はありませんか

答＝将来遠洋漁業を為すにあらざれば見込なき様思はれますので、現在の漁業状態では漁船新造制限を希望する次第です。

この「問・答」は、同号「豆新聞」欄に報じられた「江口事務官 東京出張所の監査」から昭和十年六月になされたものだと推測されるが、同年のパラオ支庁に於ける漁業従業者は七百九十七名（「現住者職業別（毎年十月一日現在）」『第五回 南洋庁統計年鑑』昭和十二年三月刊行）、「漁業許可件数」が二十一件となっている。

パラオ支庁の漁業従事者は、他の支庁に比べて断然多い。そして水産物の生産高も飛躍的な伸びを示していた。パラオ支庁長向井昌治の「洋々たるパラオの将来」によると、パラオの水産物は「昭和六年の生産高約百七十万円のもの、昭和九年度には約四百萬円となり、僅か三年間に二倍以上に飛び上がってゐる。これを個人収入として見る時は二百七十円と言ふ数字が示される。内地の各地方を調べて見ると、沖縄県は僅かに七十五円、広島県は百二十六円、神奈川県は二百二十一円、最高が大阪府の三百七十五円であるから、わがパラオは実に日本生産界の中心地たる大阪に次ぐ高い標準を以て、その生産能力を示すことが出来るのである」と述べていた。沖縄県の漁業従事者が南洋とりわけパラオに殺到したのはその個人収入の違いからして当然であつたといつていいだろう。

人口の急増で、島の開発は急速化していく。それだけに移住者への「適切なる指導と奨励」が要求されるが、同号に掲載された長山礁波の「パラオ島の開拓に就て」は充分にそれに答えるものとなつていた。長山はそこで「パラオ開拓の完成を期する上に於て最も緊要なると認むる事項」として「一、道路及び港湾等交通施設の完備」「二、土地利用基本調査」「三、水産業の増殖計画を樹立し適切なる指導奨励」「四、金融機関の整備改善を図る」をあげ、その「三」では「一、漁業組合制度の設置、二、漁業の統制（養殖漁業を含む）、三、漁場の調査、四、漁港の設置並改善、五、遠洋漁業に対する指導奨励並補助、六、加工製造販売上の改良、七、節移出検査の施行」、「四」では「一、産業組合の組織変更並改善、二、漁業組合の組織並統制、三、無尽講の指導監督、四、企業金融機関の施設」等を上げていた。

長山のあげた「事項」の「三」「四」は、江口拓務事務官の会計監査を期に行われた「某漁業者」との「問・答」の参考にされたのではないかと思われるほどである。「問・答」

と「三」「四」はそれほど重なりあうかたちになっているが、そのことはともかく、「問・答」相手の「某漁業者」が沖縄県人であったということは、沖縄県人の「漁業従業者」が圧倒的に多かったということを語っていよう。

江口拓務事務官が、サイパン・パラオの会計監査を終えて東京に戻ったのは、六月二十五日であった。その時行きも帰りも一緒だった「横田君」に「雑誌『南洋群島』に何でもいゝから是非書け」と言われ、「是非もなく、思い付を順序もなく書き並べることにした」として書かれたのが「南洋群島見聞」(『南洋群島』九月号、第一巻第八号)である。

江口はそこで、チャモロ族の副村長に招かれ、ご馳走になったこと、酒がなかったこと、広間でワルツが踊られたといったことを書いた後で「沖縄からの移民の中には、サイパンの官有林野を無断で開墾してキャッサバの栽培をやり、言葉は悪いが細々と煙を立てゝ居る者もあるのに、チャモロ族の中には斯うした生活をして居る者もある」と、沖縄の一部の移住者よりも、余裕のある生活をしているチャモロ族の人々がいることに触れ、それは「サイパンの経済的發展が、その所有土地の地代を向上さして居るのに依るのだが、島民の福利増進の意味からは結構なことに違ひない」といい、続けて次のように述べている。

沖縄人と云へば南洋では、一般の内地人と兎もすれば区別され易い。されば「内地人と沖縄人との喧嘩です」と云つたところで、長く南洋に居る人には一向奇異には響かないらしい。而かも或る人に云はしむれば、南洋が我が領有となつてより二十年、南洋に於て真の仕事をした者は、南洋興発の松江社長と沖縄人のみなのだが、沖縄人の生活程度が一般内地人より一段低い事実は否定できないらしい。それに自分の生活を切り詰めても、郷里へ送金する風習の極めて強いことから、ジャパニーズ・チャイニーズと名を付けた者もある。さり乍ら我々は沖縄人に、我が南進の先駆的勢力として正当の敬意を表さねばならぬ。そして沖縄から南洋に渡る彼等の渡航にも保護の手を延ばさねばならぬ場合がまだあるだらう。

南洋の沖縄人が、さまざまに呼ばれていたのはよく知られている。「ジャパニーズ・チャイニーズ」もその一つだといっていいだろう。しかし、それはさほど頻繁に使われていたとは思われないが、当時、一般的な日本人が「チャイニーズ」をどのように見ていたかを知れば、「ジャパニーズ・チャイニーズ」にこめられた意味合いもおのずから明らかであろう。

「南洋に於て真の仕事をした者」そして「ジャパニーズ・チャイニーズ」、南洋の沖縄人をめぐる言説は、この二つに分かれるとあってよい。それは、江口の文章にもよく現われているはずである。「我が南進の先駆的勢力」でありながら「一般内地人より一段低い」

生活程度、それは、どちらも事実であったに違いない。江口の南洋滞在は、会計監査のためということからして、そう長くはなかったと思われるが、沖縄人に関するそのような文章が書かれたということは、それだけ南洋群島の島々で沖縄人が目立ったということであろう。

九月号には、江口の文章の他に、沖縄人に触れたもので岡島清の「トラック島鯉漁業の概況(上)」がある。岡島は「概観」で「一体群島は文字通りの常夏で、気候に変化がないと同様に凡てに刺激がない、群島を通じて森羅万象全てが変化に乏しい、従つて該漁業に於ても大同小異があるから一ヶ所を知れば他を想像するに難くない。況して各地とも経営者は他府県人であつても経営法が沖縄式であり、従業員の殆んど全部が沖縄県人である限り、沖縄県の型通りで宛然同県の延長と做して想像して貰へばよい」と書いていた。

岡島の文章からすると、先に見たパラオも漁業「従業員の殆んど全部が沖縄県人である」といった状態であつたのではないか。漁業に関する「問・答」相手が、沖縄人であつたのは当然というものであつた。

岡島は「概観」で、群島における漁業は、ほとんど沖縄式であり、沖縄県の延長であると述べた後、トラック島における「漁業に就て詳細に述べる」としてその「沿革」を「本島に於ける鯉漁業の元祖とも云ふべきは沖縄県糸満町出身の玉城松栄君で、大正八年同士数人と渡航し来り刳舟を操つて礁内で追込網や建網其他で礁魚を捕つて雑漁業に従事して居た」と始め、次のように続けていた。

其間礁内浅所には鯉餌料となる礁魚や鯉類が相当豊富に棲息し礁外近くには鯉鮪魚群が飛躍するのを見て鯉漁業は必ず有望であると認識し、該漁業に転向せんと努めたが、肝心の資金なく時には刳舟を漕いで出漁もしてみたが礁外のこととて操縦意の如くならず、唯茫然と脾肉の嘆を歎つのみであつた。然し所信の念黙し難く資金の調達に苦心した結果、同十四年サイパンに渡り其処で三十尺の古船を購入し、之に馬力の発動機を据付けて鯉洋丸と命名し、勇躍出漁したのが抑も当地漁業の嚆矢である。所が運悪く出漁はしたものの古機械のこととて故障百出し折角の起業も茲に一頓挫を来し悲観のドン底につき落された。然し該漁業の有利なことを体得した彼は之式のことと頓挫せず再起を計り、八方に奔走し愈々郷里より資金を仰ぐことになり、更に十五年度南洋庁漁船費補助を得、五十尺二十馬力漁船の建造に成功し、根剛丸と命名し、昭和元年二百貫、二年に千二百貫の水揚に過ぎなかつたが愈々其曙光を見るに至つた。翌三年度に於て農林省の漁業補助を受け、事業は益々好成績を納め得ることが出来、同四年には第二根剛丸を増加し、基礎を確定するに至り、愈々鯉漁業の産業的価値が立証された。此の間の同氏の努力は賞讃に値するものである。

岡島は、玉城松栄の足跡を記したあと、事業に苦心惨憺している間は高見の見物、成功すると乗っ取ろうとするのが「世の常」だが、とりわけ移民地ではその根性が強いと述べ、玉城の事業が成功したとみるや四年には、海進社という組合が組織され、鯉漁は静岡式に限るとして静岡から人を集め、従業者の給与を月給制度にし、最初は好調であったが、半年もたたないうちに不漁に直面し事業を中止、事業主が変わるとともに経営方針を一新し「従業員は全部沖縄県漁夫に変更し、歩合制度に改正し、沖縄式に準じて実施したる結果好成績を挙げた。茲にも南洋鯉漁業は沖縄県人でないと成功せんと云ふことが立証された」といい、そのあと、五年から十年までのトラック島における漁業の移り行きをたどり「同十年五月同補助(沖縄県の漁業振興補助金——引用者注)を得て玉城松栄君第三根剛丸(六百馬力)を回航せられ、更に同年四月國吉朝助君に許可せられ目下旭丸を建造中のものを合して船数十八隻に達する盛況となつた。斯る急激なる伸展により之等関係者は昭和五年二百余名のものが現在では十倍の二千名以上と云ふ沖縄県人全勢である」と締めくくっていた。

ちなみに、おかしま生なるものの「トラック邦人戸口の推移」(十一月号、第一卷第九号、昭和十年十一月)を見ると「昭和五年以降鯉漁業勃興し沖縄県人の渡島著しく十年四月現在では次の通り」だとして「全邦人、男性一、四六一人、女性六〇八人、計二〇六九人中沖縄県人男性七九〇人、女性三一七人、計一、〇一七人」と数字を上げ「全在留邦人の半数は沖縄県人が占めて居る」と書いている。

昭和五年には二百余名であったのが、五年後の十年には二千名以上に増えたというトラック島同様、他の島々も沖縄人が増え続けていたのではないか。群島に沖縄人が多くなるに従って「サイパンの官有林野を無断で開墾してキャッサバの栽培をやり、言葉は悪いが細々と煙を立てゝ居る者もある」といったぐあいに貧苦にあえぐものたちもふえていったに違いない。そしてそれは、当然他の沖縄県人を憂慮させた。

九月号「豆新聞」には、そのことをよく示す記事があらわれている。

八月四日午後二時からサイパン南海楼に於て、龍潭同窓会主催の下に田中支庁長を初め谷川、野元両校長、若旅、板根、国場の三警部補その他沖縄県出身の有志等参集、沖縄県民の文化向上のため座談会を開催、猶ほ毎月一回この種の座談会を開いてその具体策を練ることゝなつた。

群島に於ける同県人は在留邦人の過半数を占め、雄々しくもその第一線に立つて、南洋開発のために貴い汗血を注いでゐるのであるが、遺憾ながらその文化程度は一般内地人に比して著しく低下して居り、為に面白からぬ幾多の問題を惹起しつゝある有様なので、この際彼等の教化に努むべく支庁長等有志の奮起したことは意義深いことだと頗る各方面から期待されてゐる。

「沖縄県民の文化向上運動 彩帆で教化座談」の見出しになる記事である。座談会は、沖縄県人の「文化程度」の低さが「面白からぬ幾多の問題を惹起しつゝある」ことからその解決をはかるためになされたもので、今後「毎月一回」開いて「その具体策」を練ることになったということを知っているが、そのようなさなか「面白からぬ」といってはすまされないような事件が起っている。

十一月八日付の都下各新聞の夕刊には一斉に、「南洋の殺人犯人川崎署に捕へらる」の見出でにぎはつた。

事件の条は次のやうである。

主人公、本籍沖縄県中頭郡美里村字高原九三中村溝吉（十九歳）仮名は本年三月十五日サイパン島に出稼に行き、ロータ島に渡つて池宮城秀明方に雇はれ中、去月四日夜主人池宮城と飲酒中突然四合壺で主人の頭部を殴つたうへ、頸を締め殺害し、◆十五円五十銭を強奪した後、暴風雨の中を死体を引摺つて行き、約一町位離れた断崖から海中に蹴落し、その夜は付近の物置に隠れ、十四日テニアン発の汽船パラオ丸に乗込み島を脱け十八日横浜に入港、実父川崎市三島三郎村三郎方に立回つたのを六日四時頃逮捕され、サイパン支庁に護送されることになったものである。

「何が彼をさうさせたか ロタ島殺人犯物語」の見出しで「豆新聞」に報じられた事件は、そのあと「年若い彼が何故殺人罪を犯すに至ったか」として物語風に彼の経歴をたどり、最後を「彼も生れながらの悪ではなかったのだ」と締めくくっていた。

昭和十年、サイパン地方法院検事局の扱った「殺人ノ罪」（「地方法院検事局刑事事件起訴人員罪名別（毎年申）」）を見ると「1」とある。それは「ロタ島殺人犯物語」として「豆新聞」に掲載された一件であつたと思われることからして、唯一の殺人事件として騒がれたに違いない。そしてその殺人犯が沖縄人であつたことで、一段と沖縄を見る眼がきびしくなつていったのではないか。

始まったばかりの「文化向上運動」に殺人事件は大きな打撃を与えたであらう。それだけに、「内地化」への旗がいよいよ強く振られていったに違いない。

表 『南洋群島』目録補遺

著者	題名	頁	巻	号	年	月	日
	南洋群島八月号目次		—	七	昭和十年	八	—
	目次		—	七	昭和十年	八	—
	口絵		—	七	昭和十年	八	—
	爽涼 (パラオ)		—	七	昭和十年	八	—
	サイパン美人		—	七	昭和十年	八	—
	ミス・グントウ		—	七	昭和十年	八	—
	旭球場の出来るまで		—	七	昭和十年	八	—
	北守南進	5	—	七	昭和十年	八	—
林 寿夫	施政記念日に関して	6	—	七	昭和十年	八	—
	代理部の設置	11	—	七	昭和十年	八	—
兒玉魯一	植民成否の鍵	12	—	七	昭和十年	八	—
向井昌治	洋々たるパラオの将来	14	—	七	昭和十年	八	—
	海の勇士	16	—	七	昭和十年	八	—
長山磯波	パラオ島の開拓に就て	17	—	七	昭和十年	八	—
山本繁蔵	体験を盾として	24	—	七	昭和十年	八	—
	日本とミナハサ	26	—	七	昭和十年	八	—
	パラオ民間と金融機関	28	—	七	昭和十年	八	—
池田さぶろう	漫画漫文南洋と名士	33	—	七	昭和十年	八	—
世古田竹次	南洋隨筆 官舎街のエロ泥棒	36	—	七	昭和十年	八	—
種部金太	チャモロ娘の結婚	39	—	七	昭和十年	八	—
下田串江	船中雑記	41	—	七	昭和十年	八	—
館 妙歩	群島七不思議	44	—	七	昭和十年	八	—
横田 武	群島五人男 (一)	46	—	七	昭和十年	八	—
イナシヤマ	島民児童作文 南洋サクラ	51	—	七	昭和十年	八	—
氏名不詳	パパイアウエ	51	—	七	昭和十年	八	—
たかひら生	漫画漫文 サイパンの印象	52	—	七	昭和十年	八	—
	豆新聞	53	—	七	昭和十年	八	—
	最近内外重要記事	56	—	七	昭和十年	八	—
	行く人帰る人	59	—	七	昭和十年	八	—
	南洋協会南洋群島支部会員	60	—	七	昭和十年	八	—
蓮見卓郎	パラオの野球人	61	—	七	昭和十年	八	—
坂本良平	水曜島の伝説	66	—	七	昭和十年	八	—
東山六郎	夏の魅力	70	—	七	昭和十年	八	—
西沢武夫	心得て置くべき蓄音機の智識	74	—	七	昭和十年	八	—
蘭花野	俳句 鳳凰木の花	76	—	七	昭和十年	八	—
金子 鉄	川柳 南洋に来て	76	—	七	昭和十年	八	—
狩野静夫	時事解説 繰れ行く伊エ紛争	78	—	七	昭和十年	八	—
木村錦人	選挙肅正運動	79	—	七	昭和十年	八	—
山路逸平	生保公債問題	82	—	七	昭和十年	八	—
	内地南洋群島間定期予定表	84	—	七	昭和十年	八	—
	サイパン線	85	—	七	昭和十年	八	—
本誌編集部	南洋群島を廻る島々 (その六)	86	—	七	昭和十年	八	—
長田満男	社会さまざま	94	—	七	昭和十年	八	—
	南洋ニュース	98	—	七	昭和十年	八	—
中田近夫	掌編小説 百万円事件	101	—	七	昭和十年	八	—
泉瓢六作	ユーモア小説 五十万円	105	—	七	昭和十年	八	—
	編集後記	119	—	七	昭和十年	八	—
	奥付	119	—	七	昭和十年	八	—
	南洋群島九月号目次		—	八	昭和十年	九	—
	口絵		—	八	昭和十年	九	—
	先づ港湾を充実せよ		—	八	昭和十年	九	—

筆者	題名	頁	巻	号	年	月	日
藤井 保	ヤップ島民の血を奪ふもの		—	八	昭和十年	九	—
林 一正	真珠の話	11	—	八	昭和十年	九	—
江口親憲	南洋群島見聞	16	—	八	昭和十年	九	—
岡島 清	トラック島經漁業の概況(上)	21	—	八	昭和十年	九	—
	南太平洋の布教	26	—	八	昭和十年	九	—
池田さぶろう	漫画漫文 南洋名士	28	—	八	昭和十年	九	—
横田 武	群島五人男(二)	32	—	八	昭和十年	九	—
	写真懸賞募集	38	—	八	昭和十年	九	—
蓮見卓郎	よみもの 任侠の人丹野久助	39	—	八	昭和十年	九	—
世古田竹次	ヤップ心中	45	—	八	昭和十年	九	—
	第七号「珊瑚礁其の他」の正誤表	49	—	八	昭和十年	九	—
下田串江	随筆 蚊とやもり	50	—	八	昭和十年	九	—
	南洋ニュース	52	—	八	昭和十年	九	—
西島五一	スポーツ界に光る 黒人の飛躍	55	—	八	昭和十年	九	—
木村錦人	時事解説 その後の選挙粛清運動	56	—	八	昭和十年	九	—
狩野静夫	治外法権の撤去と進展する満州國の実情	59	—	八	昭和十年	九	—
山路逸平	蔵相の公債政策永続性或る国家発展	60	—	八	昭和十年	九	—
長田満男	社会種を拾って	62	—	八	昭和十年	九	—
	川端龍子画伯が力作「太平洋」を出品	64	—	八	昭和十年	九	—
東山六郎	当代芸妓気質安全弁の彼女達	65	—	八	昭和十年	九	—
	モダン家庭大学	68	—	八	昭和十年	九	—
	南洋野球だより	69	—	八	昭和十年	九	—
KM生	練習艦隊対抗試合印象記	71	—	八	昭和十年	九	—
	豆新聞	73	—	八	昭和十年	九	—
	最近内外重要記事	74	—	八	昭和十年	九	—
	南洋協会南洋群島支部会員	76	—	八	昭和十年	九	—
	転入転出	76	—	八	昭和十年	九	—
本誌編集局	南洋群島を廻る島々(その七)	77	—	八	昭和十年	九	—
西沢武夫	心得て置くべき蓄音機の智識 2	87	—	八	昭和十年	九	—
佐藤正敏	川柳 秋の句帳から	89	—	八	昭和十年	九	—
	行く人帰る人	89	—	八	昭和十年	九	—
市来義道	笑劇 南洋一のバラオ九	91	—	八	昭和十年	九	—
	編集後記	96	—	八	昭和十年	九	—
	奥付	96	—	八	昭和十年	九	—
	南洋群島十一月号第一巻第十号目次		—	十	昭和十年	十一	—
	口絵		—	十	昭和十年	十一	—
	新しき覚悟の培養		—	十	昭和十年	十一	—
依光重親	内南洋と改名された意義	6	—	十	昭和十年	十一	—
只野安房	南洋群島開発新計画に就て	10	—	十	昭和十年	十一	—
山本繁蔵	樺太と南洋群島の産業組合に就て	14	—	十	昭和十年	十一	—
長野三郎	コブラ販売統制の提唱	20	—	十	昭和十年	十一	—
田中茂	マーシャル群島に於る氏族制度に関する一考察(上)	22	—	十	昭和十年	十一	—
池田さぶろう	漫画漫文 南洋と名士	28	—	十	昭和十年	十一	—
	殺到の移民希望	31	—	十	昭和十年	十一	—
	比島対綿布輸出日米均等協定		—	十	昭和十年	十一	—
中村貞雄	南洋隨筆 ヒナシスの蕎麦	32	—	十	昭和十年	十一	—
石川咀石	馬に牛耳られた話	35	—	十	昭和十年	十一	—
蓮見卓郎	アルコールの印象	37	—	十	昭和十年	十一	—
燧 洋生	やもりの独語	40	—	十	昭和十年	十一	—
横田 武	群島五人男(その四)	42	—	十	昭和十年	十一	—
おかしま生	トラック邦人人口の推移	47	—	十	昭和十年	十一	—
	都洛邦人古顔番付	48	—	十	昭和十年	十一	—

「南洋群島」目録補遺 (仲程昌徳)

筆者	題名	頁	卷	号	年	月	日	
おかしま生	写真懸賞募集	49	—	十	昭和十年	十一	—	
	豆新聞	50	—	十	昭和十年	十一	—	
	最近内外重要記事	50	—	十	昭和十年	十一	—	
	南洋協会南洋群島支部会員	54	—	十	昭和十年	十一	—	
本誌編集部	行く人帰る人	55	—	十	昭和十年	十一	—	
	南洋群島を廻る島々 (その九)	56	—	十	昭和十年	十一	—	
	秘露のグアノ護衛	63	—	十	昭和十年	十一	—	
東山六郎	「太陽が遠い」南洋の王様	63	—	十	昭和十年	十一	—	
	社会種を拾って——コムト風に	64	—	十	昭和十年	十一	—	
	ワールド・シリーズ タイガース優勝す	70	—	十	昭和十年	十一	—	
山路逸平	赤道下の三無人島 米国が併呑	70	—	十	昭和十年	十一	—	
	時事解説 貿易愈よ好調に	71	—	十	昭和十年	十一	—	
狩野静夫	伊エ戦争と財界	72	—	十	昭和十年	十一	—	
	混迷の伊エ戦争	75	—	十	昭和十年	十一	—	
飛田生	世相漫題	76	—	十	昭和十年	十一	—	
	常職講座 世界の人気者グライダーの話	78	—	十	昭和十年	十一	—	
	全国の若人を総動員豪華版の神宮大会	79	—	十	昭和十年	十一	—	
北沢猛夫	探偵実話 千歳村の六人殺し	80	—	十	昭和十年	十一	—	
泉瓢六	喜劇 名画 (三景)	86	—	十	昭和十年	十一	—	
	南洋少年団の創設	90	—	十	昭和十年	十一	—	
	俳句 秋	93	—	十	昭和十年	十一	—	
	編集後記	94	—	十	昭和十年	十一	—	
	奥付	94	—	十	昭和十年	十一	—	
	南洋群島十二月号第一巻第十一号目次	—	十一	—	昭和十年	十二	—	
	口絵	—	十一	—	昭和十年	十二	—	
	昭和十年を送る	—	十一	—	昭和十年	十二	—	
	横田 武	島民に酒を許すの可否	6	—	十一	昭和十年	十二	—
	田村寛一	ダヴァオ土地問題の真相	10	—	十一	昭和十年	十二	—
宮地政司	大陸移動説と南洋群島	16	—	十一	昭和十年	十二	—	
山本繁蔵	権太の町村視察記	22	—	十一	昭和十年	十二	—	
介 牟之	漁師の歌	31	—	十一	昭和十年	十二	—	
田中茂	マーシャル群島に於る氏族制度に関する一考察 (下)	32	—	十一	昭和十年	十二	—	
森 洛想子	トラック島民の趨勢	36	—	十一	昭和十年	十二	—	
蓮見卓郎	よみもの ガラルドの一日	40	—	十一	昭和十年	十二	—	
洛 想子	島勢調査余談	44	—	十一	昭和十年	十二	—	
鉄夏子	あまりに女性的な	46	—	十一	昭和十年	十二	—	
世古田竹次	群島漂流者昔譚	49	—	十一	昭和十年	十二	—	
たかひら生	サイパン印象記	51	—	十一	昭和十年	十二	—	
山崎宏	チャモロ族の童話	54	—	十一	昭和十年	十二	—	
横田 武	群島五人男 (その四)	56	—	十一	昭和十年	十二	—	
	豆新聞	62	—	十一	昭和十年	十二	—	
	最近内外重要記事	62	—	十一	昭和十年	十二	—	
	誌上年賀交換に就て	68	—	十一	昭和十年	十二	—	
	わが南洋今年の総決算	69	—	十一	昭和十年	十二	—	
	行く人帰る人	70	—	十一	昭和十年	十二	—	
	南洋協会南洋群島支部会員	70	—	十一	昭和十年	十二	—	
	帝国在郷軍人会南洋支部規定成る	71	—	十一	昭和十年	十二	—	
	時事解説 北支の自治運動	72	—	十一	昭和十年	十二	—	
	伊エ戦争は停戦	74	—	十一	昭和十年	十二	—	
山本春樹	昭和十年度南洋群島島勢調査概数	75	—	十一	昭和十年	十二	—	
	社会種を拾って	76	—	十一	昭和十年	十二	—	
狩野志津夫	続々生れる職業野球団	76	—	十一	昭和十年	十二	—	

著者	題名	頁	卷	号	年	月	日	
東山六郎	若人一万二千動員 豪華な神宮体育大会	77	—	十一	昭和十年	十二	—	
	早慶戦に涙あり	78	—	十一	昭和十年	十二	—	
	醇風美俗談戦退職積立金を巡って	79	—	十一	昭和十年	十二	—	
	競馬場の悪の華	80	—	十一	昭和十年	十二	—	
	凶暴な脱獄囚四三名	81	—	十一	昭和十年	十二	—	
	不安の帝都	81	—	十一	昭和十年	十二	—	
	雨と灰の洗礼	82	—	十一	昭和十年	十二	—	
	世相漫題	83	—	十一	昭和十年	十二	—	
	本誌編集局	南洋群島を廻る島々 (その十)	85	—	十一	昭和十年	十二	—
		中田近夫	92	—	十一	昭和十年	十二	—
中田近夫	事実小説 モリエスの死	92	—	十一	昭和十年	十二	—	
	編集後記	96	—	十一	昭和十年	十二	—	
	奥付	96	—	十一	昭和十年	十二	—	

(なかほど まさのり・琉球大学移民研究センター教授・沖縄文学)